

映するとともに、人々の日常生活と深く関わりながら、近代科学の知見や技術を取り込んでいった梵暦運動の痕跡には、文献史料より以上に多くの情報を含む多彩なモノ史料が含まれている。

須弥山儀のような特殊な機械は、技術史や科学史を含む学際的な研究の交点において、近世・近代の仏教思想史を考察することの必要性を感じさせてくれる。さらには、暦法の研究や頒暦の実態調査などは、宗教史の枠組みを踏み越えた広い知識を研究者に要請するだろう。まさにこのことが、近世と近代における「知」の断裂を示しているのであり、この断裂を背景として生じる近代的「宗教」概念の成立基盤を逆照射しているように感じるのである。

佐田介石をめぐる史料調査とその重層

—— 浅野研真から谷川穰まで ——

谷川 穰

歴史研究における「史料調査論」という場合、何を論じれば「正解」なのだろう。研究論文を読み使用史料を探す初歩から、ネットの駆使、未刊行・手稿史料の発見方法、聞き取りの方法、等々。史料保存やアーカイヴズ学とは重なりつつも、少し違うか。多分、論文作成や自治体史編纂などの必要に迫られて、いきなり「さあ泳げ」式の実地経験をすればよい、論などない、体験談だけがある、これが身も蓋もない正解なのかもしれない。よってひとまず、ここ一〇年ほど行ってきた、私自身の佐田介石に関する史料調査履歴の一端を示し、先学の史料と

の関わり方を通じて、冒頭の問いをめぐる問題を些か述べる。

介石研究の系譜を辿ると、弟子による伝記と追憶（一八八三—一九〇一年）・称賛交じりの「過去の遺物」化（一九〇一—二〇年代）・顕彰の再浮上（一九二〇年代—四五五年）の三期に大別できる。特に第三期、一九三四年に本格的な伝記を著した社会学者・浅野研真と、彼と協働した上坂倉次という二人の存在が浮かび上がる。彼らが史料の収集・紹介を行うことで、本庄栄治郎後の介石研究の水準も大きく上がった観がある。

そこで彼らの史料調査のありようを探ってみる。浅野は介石の著作を古書店に確保してもらい購入したり、介石関係者の子孫へハガキで問い合わせ郵送してもらったりするのが主たる方法であった。また反響を期待した多種の新聞・雑誌への執筆、収集した介石著作・遺品の展覧会の開催など、史料への「縁」の種を蒔いた。また上坂は一九三九年の浅野急逝後、史料・メモ類を引き継いだ。そして『佐田介石全集』等の刊行のため、メモ類を手がかりに沼津や熊本などへ調査旅行に出、介石書簡を筆写したノートなどを入手した。媒体は違うが、いずれも現代の我々の営為とそう大きくは異ならない。

こうした「遺志を継ぐ」かの如き史料のリレーのバトンは、現在私の手に渡っている。私は二〇世紀末頃から各図書館で著作や関係者書簡等の刊行史料を、浅野や本庄の著作を手がかりに探索したが、個別寺院への史料調査は空振りの連続であった。二〇〇二年、峰島旭雄論文の謝辞から浅野の長男・文雄氏宅に難儀の末訪問でき、若干の聞き取りと、上坂の遺族から託された介石関係史料四八四点を寄託され、内容目録を完成させ

た。翌冬、文雄氏より寄託分および残りの史料群の譲渡許可を得たが、翌年一月に文雄氏は逝去。○五年三月には浅野よろしく関係寺院へ封書・ハガキを用いた史料所蔵調査を試み、三か寺を順次訪問し得たが、五五%が喪失・所蔵無しの返事、四割が無回答であった。この結果には、不特定多数へのアンケートめいた手法ゆえではないかとの悔恨の念が残る。未発掘の史料への扉は、個別に丁寧交渉して初めて開くとの教訓を改めて得た。その後○六年に浅野関係史料一五〇五点を搬出、○八年に仮目録を作成、文雄氏の関係者へお届けした。

この調査・整理の途上で、一九四五年に「本土決戦間近」と危惧した上坂による史料疎開の企図や、戦後研究を止めたはずの上坂、および日大社会学教室による整理の形跡などが見えてきた。いずれもごく短い手紙、微細なメモから判明するもので、まさに「紙くず」が「史料」となる瞬間を体験した。そして、先学の収集史料群を再発掘し、その背負ってきた来歴ごと引継いで生かす作業の重要性・有用性を感じた。ただそれが先学の労苦を掠め取る行為にならぬよう、先学自身を対象にした研究をも遂行して、最終的にその史料にふさわしい保存方法や、今研究する主体と自分へと連なる道程を示すことが、ひとまず後学の責務と思われる(広義の「研究史」)。そうした履歴は、研究の面白さ・危うさ、実証研究としての信頼性も示し得る。それを「あとがき」や科研報告書にだけでなく、論文本体に書き記す作法を模索することまで含めて、「史料調査論」なのかもしれない。

私が資料について感じる二、三のこと

——京大文化史学派研究から——

菊地 暁

「普通の人々」の「普通の暮らし」を研究する民俗学にとって、「特別な書き手」が「特別な出来事」を書き記した文字資料だけでは「不十分」だ。そこで、「普通の人々」の「普通の暮らし」そのものを資料(『民俗資料』)とし、その採集と比較を通じて歴史化を試みることとなる。こうした文字資料批判とそれに基づく「資料」概念の拡張要請こそ、「民俗学」の最大の存在意義ではないかと思う。

とはいえ、任意の「民俗資料」それ自体はどこまでも「現在的」であり、いつから続くものか判断できない。そこで民俗学はしばしば文字資料を「援用」することになる。文字資料だけでは「不十分」なのであって、「不要」ではないということを確認しておこう。

筆者の場合、広義の「フィールドデータ」に関心を有している。対象となる事象と対象化するまなざしを同時に検証することのできる、極めて貴重な資料であるからだ(菊地暁『柳田国男と民俗学の近代』二〇〇一、瀝青会『今和次郎「日本の民家」再訪』二〇一二など参照)。

近年取り組んでいる「京大文化史学派」研究もその一環。京帝国大学の国史学教授・西田直二郎とその門下生を中心とした「京大文化史学派」は、民俗学・人類学など隣接分野を積極的に取り込みながら、日本の民衆宗教史研究にユニークな成果を残した一派であり、彼らを追跡することで、日本の民衆宗教